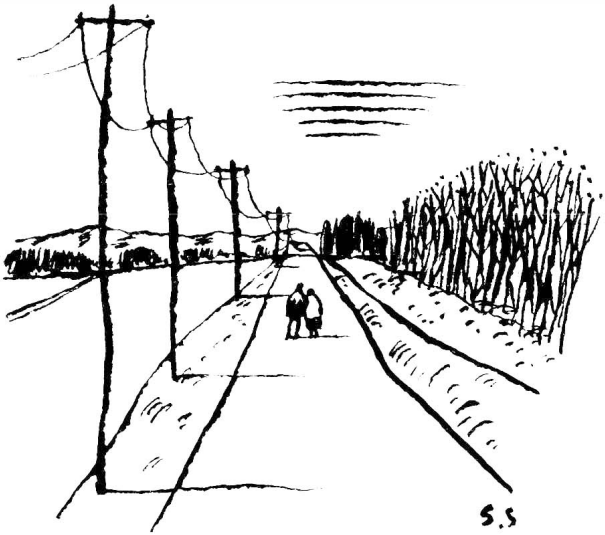
長い橋（下）

水上勉

新潮社版

長い橋（下）

水上 勉



新潮社版

長い橋（下巻）

昭和五十八年六月十日　印刷
昭和五十八年六月十五日　発行
定　価／一二〇〇円
著　者／水上勉
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電　話　業務部(03)二六六一五一一一
　　編集部(03)二六六一五四一一
郵便番号　一六二
振替　東京四―八〇八
印刷所／株式会社光邦
製本所／加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tsutomu Minakami 1983　Printed in Japan

ISBN4-10-321117-2 C0093

目次

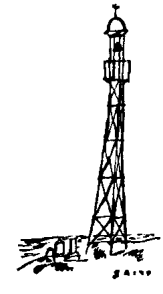
短い夏 5
もう一人の対象者 67
雪ふりつむ 108
人間の在所 164
ふたりの靴 191
雪の晴れ間 223
生きいそぐ勿れ、人の子よ 263
小さな石 314

装画・カット　斎藤真一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長い橋（下巻）

短い夏



かの子は、白地に薄グレーのストライプのワンピースを着てきた。月に一ど、保護観察対象者をひとりずつ家へよび入れ、夕食を共にしたあと、雪枝とふたりきりのわずかな時間をすごすのが習慣になっている。

食事は、和子と仙吉も一しょの食卓で、格別の料理をつくるわけでもない。ふだんの食事に仲間入りさせて、テレビを見ながら、家族と歓談するのが雪枝の方針だ。仮釈放者は、長い矯正施設生活のあと、肩身のせまい思いを秘めて、それぞれ勤め先の寮にいるのだから、殆ど、自由な一人の時間というものを持たない。かりに休日をもらって外出したとしても、遵守事項という掟を背中にはりつけての行動だから、好き放題な場所へ出入りすることもひかえねばならない。どこを歩いていても、過去の重い暦がへばりつき、古い友人や知人に会うことはなるべくならさけたかった。

さらに、また近ごろは何かと事件が起きるたび、施設の知人や友人の行動につながることもある。知人、友人が再犯をやって逃亡している場合は、警察にマークされる。更生するといっても、犯した罪の記憶は自他ともに消えるものではないのだが、自由になればなったで、新しいかたちで、身の内外をせめてくる。刑余者は、死ぬまで、その過去との闘いだ。犯した罪に、己れが成

敗されているといえる。
保護司である雪枝は、刑を終えれば、それで充分に償いをつとめ、かつ、釈放後の人生も、償いの継続だとする観点に立って、親身に寄りそうことで、対等になろうとつとめている。だが、そうは思っても、対象者側には監視されている思いがある。こっちがどう心をひらいて、相手に降りていっても、本来的に立ちはだかっている垣根を意識しないではおれないのだ。
せんじつめてゆけば、その垣根とは、法律ということになる。充分に刑に服して、過去の罪を悔い、新しい人生に出発しているのであるから、対等の人格だと言いきかせても、保護司という役まわりに立てばこその人間関係がうまれているわけだった。絆は、法律がつくったものだった。どうあがいても、雪枝もかの子も、法のむすんだ絆を捨てるわけにゆかない。したがって、そこらあたりに、いくら対等につきあおうとしても限界を感じるのである。
保護司の道は、その限界をつきぬけるところにあろう。法がつくっている垣根をとっぱらうところにあろう、というのが、雪枝のいまの立脚点だが、なかなか、自分もその垣根が乗りこせない。だから、法にきめられている月に一どの対象者との歓談も、じつはきめられたから会うのではなくて、両方から生じた歓談でありたいと願うのだ。
ところがその日、雪枝は、はじめて、かの子との垣根がとれたと思った。
不思議なことだが、逃亡中の木崎すみれが介在したことで、垣根が取れたのである。かの子は部署こそちがったけれど、勤めていた期間は、誰よりもすみれの話相手になり、人には秘めている刑余者であることも明かしていた。それゆえ、すみれの逃亡は、かの子にも他人事でなかった。そのことが、雪枝とかの子の越え得なかった垣根をとりこわしたのだ。
「田村先生……」
かの子は、食事をしながらいった。

「残念なことは、すみれちゃんをつれて、一どでもいいから、皆さんと一しょにお食事ができたらということでした。約束していたのに、それが実現しないうちに、こんなことになってしもて……」

自分の責任でもあるかのようにいうのだ。仙吉がいった。

「まあ、そりゃ早いにこしたことはなかったけどもさ……あんたの罪じゃない。あの娘に、早く来たいという気持がなかったんだから。だからこうなっちまったんでね……」

「あたしがもう少し積極的だったら、来れたんです。こうして一しょに食事いただいて、おうちの方たちとお友達になれたら……すみれちゃんだって、変ってたと思うんです。わたしが、のんきにかまえていたからこんなことになったんです……」

日曜日がきて、すみれが、羽島へゆくと、嘘をつき、昔の仲間と駅前で会っていた日のことを、悔いているのだった。すみれの逃亡はそのはじめての、外出の日にかかわっていると想像されるから、日曜日の前に、雪枝の店にきて、うちとけた話をしておれば、多少は考えも変ったのではないか、という思いが捨てきれないらしかった。仙吉は、かの子の残念がるのを、快くうけとめながら、

「ダメな娘は、いくら、うちにきて、仲よくしてもらっても、ダメなもんだよな、かの子さん」

といった。

「こりゃ……もうどうにもならん問題でね。はたの者の責任じゃないよ。当人が、しっかりしとらんのやから、どう、まわりが頑張ってみてもね……」

「そのことはわかります。けど、わたしの経験からいいますと、出所した直後というものは、たしかに動揺しているんです。落ちついているようにみえても、ダメなんです。とにかく、世の中が、施設の中にいた時と、ころっとちがうんですから。どういうんでしょうか。眼つぶしを喰ら

ったみたいに、世の中の何もかもがとびこんできます……人なみに物もいえないんですのよ。それで孤独になって落ちこんでしまいます。すみれちゃんは、大事な時期を……まちがったんでしょう……先生から、いろいろ頼まれていながら、わたしの手落ちでした……」

かの子は、眼頭をうるませて、箸をおくのである。

「そんなにいわれたら、あたしの方がもっと手落ちだったことになるわ……ね、あなた」

雪枝は仙吉を見る。

「手落ちかどうかしらんが……相手がわるけりゃ、どうにもならんよ。近ごろの若い娘の考えてることは、わしらにはさっぱりわからんからな……いや、もう、考えの根底がちがうんだから……」

雪枝は、夫のそういう物言いに反撥を感じる。基一に対してもそうだ。考えがちがうから、と投げている。ていのいい放棄だ。考えがちがっていようとも、親は親であり、子は子だろう。子はまだ親よりは未熟なのだ。いくら、根底からちがっていても、いうことはいわねばならない。考えのちがう親の立場をしっかりといっておかねばならぬ。夫は、どうも、そこのところをまたぐ。野放図である。わが息子にさえそうだから、すみれの行動に対しても、同じような立場なのだ。

和子がいなければ、雪枝は、よほど、ここで、ひとこと、そのことで、話しあってみたかった。考えがちがうからといって投げていたのでは保護司などという仕事はつとまらない。考えがちがう相手だから、たとえ、年数がかかっても、己れが思う道へすすませてやらねばならぬ。そのことが正しいと信じねばならぬ。それだから保護司なのである。すみれには、すみれの人生があった。基一に基一の将来があるように。そうして、すみれも、基一も、まだ年少であった。年長の者は、子らの将来のために、直言を吐いて激突せねばならない。相手がまちがっていたら、ねじ伏せてでもまちがったところを直してやらねばならない。それがなかったら、どこに更生保護の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

実践があろうか。そう思うと、いま、かの子が、自分ごとのように、すみれを保護しそこねたことを悔いているのがうれしかった。かの子は、すみれの職場での更生を助けることを己れに課したのであった。いまそれがよくわかる。雪枝は、はじめて、対等のかの子がいると思えてうれしかった。

「あなたの責任ではないわ。あたしの手落ちもあると思うのよ。けどもね、それはさておくとしてあたし、こんどあの娘の田舎を廻って、お母さんやお兄さんたちをみてきて、いろいろなことを考えさせられたわ」

仙吉は、またか、というふうに和子を見た。帰ってから、和子と夫には、雪枝は旅で得た思いのすべてを何どもはなしていた。そのことをいまかの子にも話したかった。対等で、すみれの将来を心配してくれているかの子にはなさずにはおれない。

「人間てね、かの子さん……どこで生れようと何をしようと、自分のもらった球根のようなものをひきずってると思うのよ。そしてそれぞれの花を咲かせるものだということがわかったの。崇福寺の和尚さんのいいなはるようなことをいうようだけどね……あたし、なんだか……人間は、うまれた所によって、その境遇で、ある程度、運命づけられるみたいに思えて、かなしかった……本当にかなしかった」

またはじまったぞ、といいたげに仙吉は、和子にビールをつげと催促する。

「そりゃ……精神のつよい人は、わるい運命でも切りひらいてゆくこともあるわ。環境をしりぞけて立派にやりぬく人はいるものよ。けど、一万人に一人ぐらいかもしれないわね……とくに、女性の場合は、条件がわるい……わるい環境に流されてゆくみたいね……」

「女にもつよいのがいるよ、かの子さん」

仙吉はわらっていった。

「そんな運命論はどうかと思うよな。生れたところでもう人間の勝負がついとるんなら、つまらんじゃないか。な、かの子さん」
「そりゃ、もちろん、そうですよ。けど、弱いでしょ、人間の大半は。小さい時は尚更だしね……すみれちゃんは、本当にいい娘だったのよ。それが、周囲がわるいから、わるくそまったのよ」
「周囲のわるいのは、どこだって同じだぜ。な、かの子さん」
仙吉は、今日は雪枝にからんでくる。
「おれは、ちょっと考えがちがう。人間は、そりゃたしかに、親に生んでもらって、この世に出てくる。けど、その人間は、もうその瞬間から一人さ。その人間の可能性を生きる一個の存在だ……親からもらった球根はそりゃひきずってはいるが、そんなもの、ぶっ切っちゃってさ……ね……自分の道をゆくわけだ。すみれちゃんだって、いまの道を、自分がえらんでるわけだ。兄さんたちは、ちがってたんだろ。同じ家に生れても、ずいぶんしっかりしてたと感心してたじゃないか」
「それはそうです。兄さんたちは男の子ですものね……」
「男と女にかわりはないよ。みんな持ち前の頭で、自分の道を生きるしかない」
「それはわかるけど……親のことをあたしはいってるのよ。あたしには、すみれちゃんの親たちはもう死んでるように思えたわ」
「死んでる?」
夫は雪枝を見た。
「そうよ。死んでました。子供の親としては死んでました。あなたのように、子は子で自分の道をゆくとはいってなかったけど……どこかで子に対してもう死んだ眼をしてたと思うの。あたし

ね、そういう親がずいぶんふえたと思うの……すみれちゃんの年代のお母さんやお父さんは、戦後に少年少女期をおくった人たちだからかもしれないけど……とにかく、自分の幸福や、自分の生活が中心で子のこととなると人まかせみたいね。すみれちゃんの親たちに限らないような気がするの。どうしてか、保護司の仲間をみててもね……自分の思想や好みでこの仕事をしてる人は多いけど……自分の子ということについては誰かにまかせているひとを見かけます。四十前後の人に多いのよね……どこかで死んだような人が……いっぱしのことをいってるのよね」

「へえ、とすると、おれなんかも死んだ仲間か？　和子はどう思う」

仙吉はビールをあおって、自分のコップについだあと、かの子のコップにもつごうとしたが、かの子は、コップに掌を伏せて辞退した。

「あたしにはわからないけど、お母さんのいうことあたってるみたい」

と和子はいった。

「子供は、親の影響をうけるのは当然だもの……お母さんは、そのことをいってるんでしょ」

「そうよ。和子のいうとおり、すみれちゃんの場合は、本当に、お父さん、お母さんがわるいのよ。いくら、すみれちゃんが純情で、うつくしい心で生きてゆこうとしても、親がひどければ、どうすることも出来なかった。悪くなるしかしかたなかった。悪くなるしか生きる道がなかったのよ。だって親からはなれるとすれば非行になったでしょ」

仙吉はだまって、またビールを呑んだ。

「かの子さん、やりなさいよ。一、二杯は呑めるんだろ」

「はい」

かの子は、なみなみとつがれたコップをようやく口にあててすするように呑んだ。雪枝が理屈っぽくなると夫は逃げるのである。

「もっとあけなさい。今日は休みなんだ……」
夫は無理矢理呑ませる。和子がそれをじいっと見ている。雪枝は、その和子と夫のふたりを交互に眺めている。いつも思うのだ。対象者の訪問日は、家庭の討論会でもあり和子の教育の日でもある、と。結論が出なくても、話しあっていることに意味があると雪枝は思う。
しかし、このやり方は、他の保護司に通じない場合があった。かの子のように傷害致死の罪を犯して、女子服役者としては重刑に入る施設生活を終えた者には、なかなか馴染めない壁がある。人づきあいも片寄る。だからふつうの家庭によばれて、家人ともども食事をして、テレビをみたり、無駄話をしたあと、台所でそこの細君や娘と一しょに洗い物をするなどの行為は、温かいものを感じさせるはずである。だが雪枝のきくところによると、他の保護司の中には、対象者との面接は、外でやるそうだ。喫茶店や街角を利用するのがよいという。家へ入れることはあっても、家人を遠ざけ、保護司個人が一室で向きあって悩みごとをきく。家には、感じやすい娘や息子もいる保護司は幾人かいる。男の対象者の場合は凄味のある眼つきで、横柄な態度をとったり、時には、金を貸してくれ、とか、衣服を貸してくれとか、ねだることもある。保護司は、こんな光景を娘や息子には見せたくないといった。また犯罪によっては、子供にきかせられぬ内容のこともあるから、密室で相談した方がよいという意見である。
月に一ど、崇福寺の本堂を使わせてもらったり、更生保護会の会議室を使って、二区の保護司の集まりがある。集会は、それぞれ個性のある保護司たちの意見が出てにぎわうが、体験報告がいちばん、興味もあり参考になる。雪枝は、仲間の中に、対象者を家人同様に扱う人がいるとうれしくなる。同志を得た気がするのだ。
社会に敵意とまでゆかなくても、馴染めない怯えと不安を抱きつづけて生きねばならぬ、過去の罪を背負った刑余者を保護する仕事である。社会の方から差別しては、永遠に更生保護は画餅

だろう。その社会とは、人間の集まりだ。刑余者と立ち会う人間、まず保護司が、差別心をもって対するようでは、敏感な刑余者は心をひらかないだろう。人を殺したのはわるいことにちがいないが、しかし、充分にその罪を悔い、刑に服して新しい人生を生きているなら、対等の人間ではないか。こっちが垣根をとっぱらって、つきあわねば、どうにもならない。保護司は刑余者にとって、社会の入口の人間だという思いが雪枝にはつよい。

だが、そのことで、他の先輩保護司と衝突することがあった。雪枝は、保護司になってまだ六年目で、経験は浅い。古い保護司になると、愚堂和尚のように三十年もの体験を積み、いろんな刑余者を処遇している。殺人犯もあり、詐欺犯もあり、放火犯もあり、強盗傷害犯もいた。人がそれぞれちがうように、犯罪も多様であって、長い施設生活を終えて社会に出た刑余者は、それなりに、屈折した考えをもち、ゆがんだ針金のように、どう直してもゆがみのもどらない人もいる。保護司はそれらの対象者を同時に何人もうけもつから、犯罪別にしたり、囚役年数別にしたりして、取りあつかう人がいる。雪枝はそういうやり方がきらいだ。人間が相手だ。こっちの都合のよいようには人間は取りあつかえない。家人同様のつきあいは理想だが、人によっては、家人にあわせずに、街角であうのは、その対象者の事情を慮(おもんぱか)っての場合でもあろう。ある保護司は、兇暴な詐欺犯の刑余者を家庭に入れてやさしくしたために、留守中にその当人に強盗に入られて、ひどい目にあったことがある。

社会に敵意をもって出てくる人間には、社会の窓口である保護司の家が、社会の象徴である。カラーテレビがあり、冷暖房器具がととのい、ピアノがあり、ビデオのある裕福な家の未亡人が、夫の死後、退屈をまぎらわせるため、かねてからの社会の下積みに生きる人々への奉仕を思いつき、保護司を志願して、採用される。刑余者はその家の中をみてあまりにも、ひらきのあるぜいたくなくらしぶりなので、反感をもった。結果は再犯事件をうんだのである。こんな事件が起き

ると、当然、保護司会でも問題になり、対象者の処遇方法について、いろいろ意見がかわされる。外でしか会わない人がふえたのもその事件以後のことだった。緻密に更生保護の実績をあげようとするには、対象者の個性に応じた処遇が必要となってくる。だから雪枝のように、垣根をとっぱらって、何もかもあけっ放しにして交際する仲間は、わずかしかいないのだった。

「あなたの対象者は、おとなしい方ばかりだから……」

と雪枝はよくいわれた。林田かの子と赤井さとみのことだ。かの子は傷害致死で夫の愛人を死なせているし、さとみも傷害罪だった。どっちも妻の座にあって、何不自由ないくらしをしていたが、かの子は夫が女あそびして、家をかえりみぬ不行跡なので嫉妬に狂い、さとみは姑の仕打ちに耐え切れず、兇行に及んでいる。だが、二人とも人柄はよいのだった。一生懸命働いて、自立の道をすすんでいる。おとなしいといわれれば、そのとおりだけれど、雪枝だって、心の隅で、かの子の何げなくいう昔ばなしのなかに、おそろしい罪を犯したその夜の、狂った形相がかさならぬことはない。仲間におとなしいと羨まれても兇行をなしたかの子とさとみの過去を思うと、ぞっとする思いにとらわれる瞬間はあるのだ。おとなしいとみるのも、おそろしい性格を秘めて、とりすまして生きているとみるのも、見る側の自由だ。こっちが垣根をもてば、相手もそれなりのつきあいをするだろう。隣近所の人だって垣根ごしに物をいうのは、ごく自然だ。再犯の舞台となった保護司の家の不幸は気の毒だが、家へ入れても、心に垣根をもっていれば同じことだと思う。

基一や和子を、かの子とさとみの訪問日になるべく家にいさせて、食事もともにさせ、あと片づけも一しょにさせるのは、そういう対象者への思いやりもあるけれど、人間が本来もっているところの差別心への闘いだと雪枝は思っている。

叔父育造はよくいったものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com